



武道歌撰集

上卷

今村嘉雄

第一書房

**【編者略歴】**

今村嘉雄（いまむらよしお）文学博士  
明治36年高知県生。昭和7年東京文理科大学卒業、  
東京高等師範学校助教授、同教授を経て昭和24年  
東京教育大学教授、東京教育大学体育学部長、東  
京体育専門学校長を兼任。昭和42年退官、同大学  
名誉教授。その後日本学校体育研究連合会会長、  
日本武道学会会長、国際武道大学評議員を歴任。  
現在、日本古武道協会常任理事、日本教育研究連  
合常任理事。

**【主な編著書】**

日本武道全集、日本武道体系、日本の武道、近代  
剣道名著体系、体育大辞典、資料柳生新陰流（以  
上監修執筆）。日本体育史、西洋体育史、体育史資  
料年表、十九世紀における日本体育の研究。



**武道歌撰集 上巻**

---

1989年3月20日 印刷 定価 8,500円  
1989年3月25日 発行

編者 今村嘉雄  
発行者 村口一雄  
発行所 第一書房

〒113 東京都文京区本郷6-16-2  
電話 03(815)1072 振替東京4-39120  
FAX 03(816)1854

印刷 熊谷印刷 製本 田中製本印刷

---

乱丁本・落丁本はお取替えします（送料小社負担）

## 総序

狩猟や戦闘に起源する武道は、日本民族の歴史とともに古い。日本が国家として統一を見る四、五世紀頃から徐々に武技・儀礼・芸能・教育・競技などに分化をはじめ、ついには養生法・趣味として、重層しながら発展する。

**武道歌の主流武道教歌** 室町末期に流儀として新しい体制を整えはじめた武道は、教育としての学習や指導の方法を素朴ながら成文化した。それとともに武道歌が出現する。これを武道教歌と呼ぶことにする。武道教歌は当初から二つの様式をとる。その一つは各流派毎に、家芸学習上の心得や要領を十首程度に、多い場合は数百首にまとめたもので俗に「歌伝書」と呼んでいる。その二は各伝書、伝巻毎に随所にキーワード風に引用された歌や句である。

前者はわずかの例外を除き自流独自の教歌を内容としており、これに対して後者は当初から一流歌人の名歌や名僧作の道歌を引用しており、発句(俳句)なども散見される。

**武道教歌外の武道歌の重要性** 古武道はたしかに近代および現代武道に直結するルーツであり、その教歌が質量的に武道歌の主流、中核であることは当然ながら、必ずしもそのすべてではない。後でふれるように武道教歌が技法や心法の奥を求めるだけでなく、人としての奥を追い求める行である限り、武道歌には万葉以後の歌書・文学書・史書・戦記物語などにみる国土讃歌、国土愛、防人達の、民として子としての使命感をうたったもの、教養ある武人達の高格調の歌、その辞世にみる生死観等が含まれる。特に江戸期の国学派歌人や俳諧師達が、往時の英雄達の生き様に對して、あるいは美辞を並べて称賛し、あるいは手きびしく批判した歌や句にみる明暗両側面からの評価、批判は

無視できない。さらに前後期封建社会にみる善政、秕政に対する俳諧師達の鋭い感性も見逃しがたい。本稿が、武士教育の中心教歌に対して広く和歌以下の狂歌・道歌・俳句・川柳にまで落穂拾いを試みたのも、右のような理由に他ならない。

### 歌伝書三題

元龜二年の写本という沢庵序文付きの「塚原卜伝遺訓抄」（卜伝百首）、年記のない「上泉伊勢守秀（信）綱稽古訓」および文禄二年九月成立の「柳生石舟斎宗敵兵法百首」の三点はそれぞれ近世武道の基本思想を踏まえているようだ。「卜伝百首」は卜伝自身が、鹿島神宮の祝の家の家（はぢ）の出であり、百首の半数以上を弓馬槍劍等の武器（具）の吟味にあて、日常生活にあっても、「常在戦場」の心掛けに徹し、清廉潔白な生活に終始し、最後は生死を越えて「不惜心命」「心技一体」の境地に到達することだと詠っている。次の「上泉稽古訓」は旧武徳会武道専門学校所蔵の写本で、心法一偏、禅色が濃厚である。江戸柳生初代、二・三代あたりから鍋島支藩、小城の鍋島家に与えた上泉伊勢守の奥書のある「拙聞集」の抜粹らしい。

第三は上泉の新陰流をついだ柳生宗敵作。文禄二年（一六〇三）成立。前二者に対して儒教色が濃い。「兵法の極意は仁義礼智信」とか「五常の心」など「人としての極意」を詠っている。この頃天下は既に秀吉により平定され、秀吉の軍は明に向け進攻していた。天正元年（一五七三）室町幕府滅亡とともに柳生に隠棲した宗敵は二十余年間、家芸新陰流の工夫を続けつつ天下の形成を傍観、やがては兵法不用の平和な時代が到来することを予想していたのかもしれない。彼の兵法百首には、気負ったところがない。年齢（六四歳）のせいだけではないようだ。彼が凡庸な人物でなかったことは文禄三年、五男の宗矩と共に家康に呼ばれ、京で家康から起請文を受けていることでもわかる。宗敵の兵法百首は柔道の竹内流の歌書「竹内流心要歌」に三〇首程引用されている。

### 万葉にはじまる武道歌

武道そのものが流派武道以前に成立していたように、武道歌もまた万葉時代にさかのぼ

る。万葉期の歌には祖国・自然・故郷・親子のきづな等に対するおおらかで素朴な歌が多い。

御民われ生ける験あり天地の 栄ゆる時に逢へらく思へば 海犬養宿祢岡麻呂

霰降り鹿島の神を祈りつゝ 皇軍に吾は来にしを 那賀上丁大舎人部千文

銀も金も玉も何せむに まされる宝子にしかめやも 山上憶良

このような歌は、それから約千年後の近世末期の先覚者たちによって

伝えては我が日の本のつはもの 法のりの花咲け五百年の後 林 子平

屍は草むせ水づけ国のため 心の瓊矛通らざらめや 大國隆正

等の憂国歌として開花する。

近代日本の夜明と武道歌 流派武道ないし近・現代武道は、専門的徹視的な側面と同時に巨視的な側面を軽視し

てはならないであろう。武道歌もまたそうあってほしい。学習者の個性を生かす、きめ細かな配慮をこめた歌と同時に、世界のなかの日本および日本人に目覚めた武士たちが詠んだ歌には次のようなものがある。

天さかる蝦夷を我が住む家として ならば千島のまもりともがな 伴 信友

みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ 舟より遠くものをこそ思へ 佐久間象山

武蔵の海さし出づる月は天飛ぶや かりほるにやに残る影かも 佐久間象山

君よ君よくみそなはせ富士の嶺は 国のしづめの山といふなり 三条西季知

このような歌は、封建社会七百年を通じて本来同一民族でありながら、互いにせめぎあつた末にたどり着いた、世界のなかの日本を見つめる武道歌ともいえよう。

しかしこれだけが新しい武道歌ではない。

日本人の本性を見つめる歌　心の歌こそが武道の求める歌ともいえる。

その点からすれば、先ず沢庵が禅と劍の極意を習合させ、劍禅または禅武一体の哲学を実現させ、伝書・伝巻の品格を高めたが、それはせいぜい十兵衛三藏の「月之抄」までであった。それは学僧としても一流であった沢庵であってはじめて成し得たことであり、爾余の伝書に見る名歌の引用は見当はずれのもの、こじつけ(牽強附会)としか思えないものも無いではない。

むしろ教訓歌として成立した狂歌や道歌のなかに武道の歌としてふさわしいものが少なくない。また一流の俳諧師の作品にも心を打たれるものがある。川柳には俳句と区別がつけにくいものもあるので、川柳もまた武道歌に導入されている可能性もある。以下、武道歌と関わりをもつそれらについて考察するが、このことは武道歌としては正統的なものと周辺のなものとを調和させ、正統的なものをいっそう活性化させることにもなるであろう。

**神儒仏三道歌**　武道歌は武道と同様、神・儒・仏道と深く関わる。一休宗純はその狂歌集のなかで三道を次のように詠んでいる。

正直に心すなほに何事も　よこしまなきを神道といふ

是非をわけ国を守護して身をたゞし　民を救ふを儒道とはいふ

ねんぶつは申さずとも専心に　なさけや慈悲を仏道といふ

**武道歌と狂歌**　柳生石舟斎は「兵法百首」の巻末識語に「兵法百首、狂歌をつらね侍る」と述べている。もともと狂歌は万葉集の戯笑歌(一六巻、三八五四)、古今集の俳諧歌(一九巻、雑体一〇一一)の系統をひく滑稽・諧謔を詠んだ卑俗な短歌だが、武道歌はあくまでも教訓性を重くみ、滑稽・諧謔・卑俗性を認めないゆえ、むしろ道歌・教歌・伝歌などと呼ぶべきである。もっとも仏教などの狂歌には、一休のそれにみるような滑稽性と教訓性を併せもったも

のもある。たとえば、

さとりぬるきやつめが身とて何かある　へんてつもなきあばら骨かな　古今異曲集

右は達磨の絵にしたためた沢庵の讃である。

武道書にはじめて仏教狂歌を引用したのは前述の通り「不動智」の二首、次いで十兵衛の「月之抄」に一六首をみる。「不動智」に引用の「心こそ心まよはず心なれ　心に心こころゆるすな」は、「不動智」巻末にのせた宗矩への諫

言文をしめくくったものである。この道歌は、あるいは沢庵と同宗同寺の大徳寺四七世住持一休宗純の

心こそこころまよはず心なれ　こころの駒にこころゆるすな

の転用であり、一休のそれは、彼よりも八百年も前の万葉歌人柿本人麻呂作で「古今和歌六帖」所収の

心こそこころをはかる心なり　心のあだはこころなりけり

にヒントを得たものかも知れない。

### 狂歌則道歌

武田信玄は戦国武将の中では、かなり教養のあった武将で、その点では毛利元就と双璧ともいえよ

う。その家訓を見ても論語からかなり引用している。しかし父を今川家に追放した不孝を恥じて生涯論語を手にしなかつたとか、盲人に身をやつして潜入する間諜対策として、国内から盲人を尽く追放したという伝説もある。後でそれが川柳に出てくる。それはそれとして彼の作に、

人は城人は石垣人は堀　情は味方あだは敵なり　後撰夷曲集四番

はひろく知られている。

その他にも流派以外ですぐれた武道歌（狂・道歌）が見られる。狂歌では、

先陣の苦をまぬがれて内陣の　旗頭こそゆかしくまがへ　熊谷寺にて蓮生法師の木像を見て　石田未得



頼政の骨ははかなくくづれども 扇の芝に名は残りぬる 扇の芝を 同

藤川をやがて平家の落武者は ね耳に入りし水とりの音 寝耳に水 正舎

道歌では、

子に迷ひ気まゝ気づいに育てたる 子供の親はいつも苦をする 一休

かずかずの神や仏のご恩より 忘れまじきはふた親の恩 同

百姓のすきくは馬の三つこそ わが重代の三たからとしれ 同

余念なく遊ぶ子供姿こそ 神代の人の心なるらん 同

俳句と武道 武道書に引用した俳句第一号は、室町時代末の連歌師飯尾宗祇作の

藤花の音きくほどのみやま哉

この句は沢庵が十兵衛作「月之抄」に引用したもので「至極静かなる心なり。風水の音を聞くといふ習に、此語を沢庵大和尚の取りあはせ給ふなり」と注されている。原句には「藤花音きく……」とある。

この他で目ぼしいのは上巻五九―4にみる

定めぬを定めにさだむ時雨哉 信玄僧正

同意の句が下巻一四―6にも

定めなき定めにしたる時雨かな 信玄

とある。何れが原の句か定かでない。定めなきは、武闘・軍法のことを意味したものか、人生無情にかこつけたものであるうか。この他では上巻の竹内流兵法初心手引草に四句ほどある。

「秀句が多い俳句 たたとえば前にもふれた松尾芭蕉の句二点をあげてみる。

夏草や兵共がゆめの跡

むざんやな甲の下のきりぎりす

元禄二年（二六〇）芭蕉は奥州へ旅し、衣川（高館）の古戦場に立つ。ここは、文治五年（二六〇）源義経・武蔵坊弁慶など一党が藤原泰衡に攻められ、ことごとく戦死した場所。その時義経・弁慶は互いに辞世を交わした。

六道の道の衢ちまたに待てよ君 後れ先立つ習ありとも 弁慶

後の世も又後の世も廻り会へ 染む紫の雲の上まで 義経

右は「義経記」終巻の一節である。たとい「義経記」が室町初期の作者不詳の軍記物語で、伝説的史料であり、両者の辞世の真偽についても問題があるにしても、義経主従がここで憤死したことは事実である。芭蕉もまた、史実にも「義経記」にも明らかならずである。彼は中国の杜甫の春望の詩「国破れて山河あり 城春にして草木深し」の一節を引用し「義臣すぐってこの城にこもり、功名一時の叢となる」と記し、周知の「夏草や兵共がゆめの跡」の一句を残している。

芭蕉はさらに今の石川県小松市の太田神社に詣でる。ここには不運の老雄斎藤実盛の遺物がある。かつて源氏方であった斎藤実盛（二二六）が幼い義仲を抱いて木曾に落ちのび、のち平家につかえ平維盛の軍に従い鬢髪を墨で染め、錦の直衣を乞うて出陣、義仲の軍と戦って死ぬ。その時の鎧と直衣の切れはしを前に詠んだのが「むざんやな甲の下のきりぎりす」。

序 川柳と士道批判 流派武道歌には川柳を見ない。もっとも中には俳句と区別のつけにくいものもあることは前に

ふれた。俳句と川柳はともに五七五の一七文字の短詩ながら、俳句がその性格上和歌に近く、川柳は狂歌に近い。反面、川柳の中には人物、世相などに対する批判精神の旺盛さを垣間見ることができる。

川柳を活性化させた要因はいろいろ考えられるが、特に一八世紀末に及び、幕府並びに諸藩の経済的貧困や下級武士や庶民階層の中に教養人が多くなったこともあげられよう。それには藩学・郷学をはじめ、全国数万という寺子屋教育が大きく寄与したともいえる。俳句まがいの川柳としては

梶原が一生のはれ梅の花

六ツの花常世が運のひらき口

楠といふ名も石になりにつけり

批判的なものとしては、

その筈じゃないといふ間に堀を埋め

松蔭に寝て食ふ六十余州かな

武士が驚までに使はるる

役人の子はにぎにぎをよく覚へ

役人の骨ツばいのは猪牙に乗せ

儉約を武芸のやうにいひ立てる

最もタブー視された幕府の政策批判として、大阪冬夏の陣の関東方批判、松平（家康の原姓）一族のため骨を抜かれた三百諸侯や旗本八万騎、五代綱吉の生類憐みの令批判、その他に対する批判は川柳ならではの表現であった。史上の英雄忠臣に対しても川柳はさめた皮肉を忘れない。ただし赤穂義士に対しては好意的である。

信玄は七書にひいで四書にもれ

読むたびに頼政とかく徳をつけ

古狸めがと千早の寄手いひ

蘭丸をいつち惜しがる本能寺

見物はむだ口のない泉岳寺

桜木にちんぷんかんを書いて落ち

**四詩様々の表現** 同一の題材に対する四詩それぞれの表現として楠木正成の場合、

湊川御墓の文字は知らぬ子も 膝折りふせて嗚呼といふめり 橘 曙覧 和歌

末の世もくみてかぐはし咲く花の 名に流れたる菊の下水 小島橘州 狂歌

なでしこにかゝる涙や桶の露 芭蕉 俳句

正成は鎧を着せておかしがり 川柳評万句合 川柳

**おわりに** 二十数年前、京都の鈴鹿家で沢庵の序文つきの「卜伝百首」を、またほとんど同時期に東京初台の柳生家で「石舟斎兵法百首」を閲覽できたのがきっかけとなり、爾来仕事の合間に集めた武道歌が八千点を超えたので、七千六百点ほどにまとめてみた。採算のあてもない本書の出版に協力された第一書房主人村口一雄氏夫妻並びに社員各位に深謝したい。なお本稿のために長年にわたって、心からなる友情と協力を惜しまれなかった同学の方々並びに貴重資料の閲覧その他格別の便宜をいただいた官公私設の図書館、文庫関係の方々に対しては、本文および巻末に芳名を記し敬謝の意を表したい。

序

総

昭和六十三年十二月二十日

満八十五歳の誕生日に

今村嘉雄

## 例言

一、上巻は剣道・居合・柔道・弓道・槍術・馬術・砲術・水術・手裏剣・忍術でまとめ、下巻は軍歌・武道随筆および近代武道までで武歌の部を終り、和歌・狂歌・道歌・俳句・川柳の順でまとめた。

一、全所収歌詩七五九五点につき、上下巻ともに初索引をつけた。上の句のうちの五・七文字を現代ひらがなで示した。

一、全歌詩は「武道歌」と総称し、流派武道のみを呼ぶ場合は「教歌」とし、下巻の和歌以下は、それぞれ和歌・狂歌・道歌・俳句・川柳とした。

一、教歌の中に引用されたオーソドックスな和歌は、流派によって引用のしかたも一様でないので、一応そのまま教歌として上巻に含めるとともに、下巻の和歌の部に第六、第七の部門を設け、勅撰和歌に属するものは第六に、勅撰和歌以外のもは第七にまとめ、同時にそれらが武歌のどこに引用されているかをも明示した。

一、下巻、近世の和歌(一)の二五に赤穂浪士の和歌および俳句をまとめ、別に付録として「義士一覧表」をのせた。

一、人名、用語索引を加えた。

言  
例  
一、教歌総数五七三一、和歌以下一九〇八。内訳は剣術一三九六、居合一八〇、柔術六二一、弓術九一二、槍術五一五、薙刀四一、馬術五五九、砲術一七二、水術三八、手裏剣二八、忍術五〇、軍書四八九、隨筆三四三、近代武道三八七、和歌八一〇、狂(道)歌五七七、俳句一九〇、川柳三三一。

一、本書上巻の本文には読解の便宜をはかるために次のような改訂を加えている。

- ① 仮名づかいは歴史的仮名づかいによったが、「む」「ん」の表記については底本のままとした。
- ② 歌中の語句と送り仮名については、底本のままとしたので統一をとっていない。
- ③ 濁音と思われる語には濁点を加えた。
- ④ 歌の表記については、漢字・仮名が一方にかたよって難読な場合もあるので、適宜、仮名書きを漢字に、漢字を仮名書きに改めた。
- ⑤ 読み誤りやすい語にはふりがなをつけ、読みの困難な語には右側に( )を施して読みを付した。  
例、「さまの矢」。  
(狭間)
- ⑥ 明らかな誤字は改めたが、判断のつかないものには右側に( )を施して正しいと思われる語句を付した。  
例、「羽高き」。  
(把)
- ⑦ 反復記号「ゝ」は同一語句の繰り返し返しの場合に用いた。  
例、「ものゝぶ」。
- ⑧ 二語から成る語句には反復記号を用いていない。  
例、「月よよし」。
- ⑨ 上が濁音で下が清音の場合には反復記号を用いていない。  
例、「づつ」。
- ⑩ 反復記号「と」は用いないことにし、「中と」「色と」などは「中々」「色々」とした。
- ⑪ 底本にある詞書、奥書はそのまま掲載した。

武道歌撰集

上卷——目次——

目次

序  
例言

劍術

一	塚原卜伝遺訓抄	一	一三	一刀流兵法至極百首	六
二	上泉信綱稽古訓	二五	一四	一刀流兵法秘伝書	八
三	柳生石舟斎兵法百首	六八	一五	一刀斎先生劍法書	六
四	新陰流百首	二九	一六	北辰一刀流十二箇条目錄	八
五	兵法家伝書	四〇	一七	北辰一刀流口授	〇
六	月之抄	四三	一八	千葉周作和歌	三
七	武蔵野	四六	一九	千葉周作狂歌	七
八	宗冬兵法聞書	五〇	二〇	千葉周作俳句	〇
九	庄田喜左衛門兵法百首	五三	二一	甲源一刀流兵法歌	五
一〇	柳生宗冬兵法物語	六三	二二	二刀流兵法問答・円明水哉伝	七
一一	尾張柳生新陰流兵法歌	六四	二三	示現流兵法書	〇
一二	一刀流兵法割目録	六六	二四	示現流兵法察見	五



	二五	示現流兵法切紙……………	一三三	三六	心形刀流兵法歌……………	一五
	二六	示現流兵法書題伊呂波歌……………	一三五	三七	平常無敵流兵法……………	一三
	二七	示現流兵法和歌集……………	一三〇	三八	念流兵法心得……………	一壹
	二八	示現流聞書喫緊錄……………	一三三	三九	伊沢流……………	一七
	二九	直心正統一流兵法理歌……………	一三六	四〇	天然理心流……………	一六
	三〇	直心影流初伝目錄究理の歌……………	一三五	四一	如水流秘歌……………	一七
	三一	山田光徳究理の歌……………	一三九	四二	初実験理方兵技録……………	一壹
	三二	山田光徳伊呂波利歌……………	一四二	四三	神道無念流……………	一兵
	三三	長沼国郷伊呂波理歌……………	一四三	四四	鏡新明智流……………	一七
	三四	長沼綱郷伊呂波理歌……………	一四四	四五	星千之劍道百首……………	一七
	三五	直心影流理歌員外……………	一四五	四六	一刀正伝無刀流……………	一七
居合術						
	四七	林崎無楽流居合指南歌……………	一四九	五一	和新心流居合初学用法……………	一〇三
	四八	林崎流居合指南秘伝之書……………	一五五	五二	山岸流居合歌之卷……………	一〇六
	四九	夢想流居合口伝歌……………	一五七	五三	長谷川英信流居合心持引歌……………	一〇九
	五〇	田宮流居合心和劍秘之卷……………	一九九			
柔術						
五四		竹内流躰要之卷……………	三五	五五	武術 竹内流心之備兵歌百首……………	三七